

Title	スワデシ運動における組織について：東ベンガル・バコルゴンジ県の祖国友好協会の場合
Sub Title	On the organization in the Swadeshi movement with special reference to the Swadeshi Bandhab Samiti in the Bakarganj District, East Bengal
Author	白田, 雅之(Usuda, Masayuki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.49, No.4 (1980. 3) ,p.83(361)- 117(395)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19800300-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スワデシ運動における組織について

—東ベンガル・バコルゴンジ県の祖国友好協会の場合—

白田雅之

- 一 はじめに
- 二 スワデシ運動初期におけるバコルゴンジ県の組織上の対応——祖国友好協会の確立
- 三 スワデシ運動組織の展開——スワデシ運動における祖国友好協会
- 四 スワデシ運動における末端活動家
- 五 おわりに

一 はじめに

スワデシ運動は、インド独立運動の政治指導部を構成した中間層^{ミドルクラス}が、はじめてかなりの地域的広がり^{ミドルクラス}と集中性をもつて、かなりの規模の大衆を動員して反英闘争を展開し、自治要求^{スワラジ}を提起したという点で、近代インド史上ひとつの分水嶺をなすものであった。スワデシ運動は一九〇五年のベンガル分割を直接の契機として始まったから、ベンガルを中心に展開したことは当然の成行であった。ベンガルにおけるスワデシ運動の研究は独立前の一九三二年に、運動の推進者の一人であったビノイクマール・シヨルカール（一八八七—一九四九）のベンガル語の著作、『新しいベンガルの出発』⁽¹⁾あたり⁽¹⁾に始まり、既に半世紀に及ぶ蓄積をもっている。

一九七三年に出版されたシュミット・シヨルカールの大著『ベンガルにおけるスワデシ運動、一九〇三—一九〇八』⁽²⁾

スワデシ運動における組織について

(三六一)

八三

は、これまでの蓄積を集大成する研究であるとともに、それを批判的に乗りこえる新機軸をも打出している。まず継続面では、一九五〇年代から六〇年代はじめにかけてムカジー夫妻が精力的に解明した点、すなわちスワデシ運動が単に政治運動ではなく、教育・文化運動でもあったことがおさえられている。ところで、ムカジー夫妻の研究には、⁽³⁾あまりにもベンガル民族主義的傾向が強く出すぎているきらいがある。一九六〇年代には、インド総督文書を利用した研究⁽⁴⁾によって、スワデシ期におけるインド植民地政府側の状況が明らかにされるとともに、全インド的視点が回復された。一九六七年刊のオモレシュ・トリパティ教授の『過激派の挑戦』は、一層民族運動に則した形で全インドの問題を提起した。⁽⁵⁾また教授が経済史的観点を導入したことも見過すことはできない。トリパティ教授の指導下に研究を行なったシュミット・シヨルカールの著作は、この問題意識を踏まえた上で、改めてベンガルをテーマにしているのである。シュミット・シヨルカールの新機軸は、(一)スワデシ期における運動の諸潮流を、「穏健派」、「過激派」の二分法で処理することを批判し、四つの傾向を抽出し、肌目細かな分析を試みることによって、具体的な歴史像を描くことに成功していること、(二)新資料を発掘・紹介して、労働運動を分析していること、^(モフオツシヨル)(三)地方の運動組織の重要性を指摘し、周到な分析を行なっていること、などが挙げられる。シュミット・シヨルカールの研究は、スワデシ運動が数々の可能性を内包しながらも、なぜ崩壊せざるをえなかったかという問いに焦点が絞られている。シヨルカールは、スワデシ運動の主体を中間層(小土地所有者、中間的土地保有権者及び前二者から派生した知識人)と捉え、彼らが農民大衆を結局は動員できなかった点に、運動の限界を指摘している。⁽⁶⁾この観点からすれば、当然ムカジー夫妻、ロメシュチョンドロ・モジユムダール(Rameshchandra Majumdar)、『ビマンベハリ・モジユムダール(Bimanbehari Majumdar)らによって、「戦闘的民族主義」(militant nationalism)』と積極的な評価を受けてきた、スワデシ運動末期から顕著になるテロリスト運動は批判の対象とならざるをえない。農民大衆を動員しえず運動が行詰まった時、中間層の急進分子が大衆への働きかけを事実上切捨てたところに成立つ冒険主義という評価がテロリスト運動に与えられることになる。それはナクサライト運動末期に対するシヨルカー

ルの批判と重なり合うものであった。⁽⁷⁾

小稿は、シヨルカールの問題意識を継承し、スワデシ運動がもっとも強力に展開されたと指摘されている。⁽⁸⁾東ベンガルのバコルゴンジ県における運動の実態を明らかにしようとする意図をもつ、一連の論文の一つである。シヨルカールの綿密な実証的大作は、当分スタンダードな研究の位置を占めるであろう。筆者は、バコルゴンジ県に地域を限定し、シヨルカールの研究を検証し、併せて新たな視角を獲得したいと考えている。これまでにも、バコルゴンジ県におけるスワデシ運動の担い手を小土地権所有者を含む中間的土地保有権者ととらえ、その社会経済史的把握をめざす一試論を発表してきた。⁽⁹⁾また別の一稿では、スワデシ運動に至る四半世紀間のバコルゴンジ県の教育、宗教、政治における変革の努力を跡づけ、スワデシ運動の前提の解明に努めた。⁽¹⁰⁾しかし、バコルゴンジ県のスワデシ運動は、前史における蓄積の上に立ちながらも、新しい政治状況の中で、前史からいかに切れるかという点にある意味では運動の拡大深化が賭けられていたように思われる。小稿は、運動組織の検討を通じて、この点を明らかにすることを一つのねらいとしている(第二節)。

シヨルカールは、バコルゴンジ県のスワデシ運動組織、祖国友好協会(Swadesh Bandhab Samiti)を「スワデシ期に形成された組織中もっとも大衆組織に近いものであった」⁽¹¹⁾と評価し、並々ならぬ関心を払っている。しかしシヨルカールの研究では、その章の立て方から生じる制約から、運動の進行状況と組織の対応という観点が欠落していると思われる。この点を解明することが小稿の第二のねらいである(第三節)。運動の組織の構成と展開を跡づけることにより、バコルゴンジ県におけるスワデシ運動の相対的成功と限界の所以を示すことが、小稿が全体として追求する課題である。

註

(1) Binaykumar Sarker, *Naya Banglar Gora Pattan*,

Calcutta, 1932, 2 vols. この本については、ビヤン・ゴハリ

||モジウムダル、白田雅之訳、「ベンガル州の民族運動史研究」

スワデシ運動における組織について

『通信』アジア・アフリカ言語文化研究所。第三六号、一九〇

―ページを参照されたい。

(2) Sumit Sarker, *Swadeshi Movement in Bengal 1903*

—1908, New Delhi, 1973.

(c) Haridas & Uma Mukherjee 夫妻の著書は多数であるが、代表的なものは以下の通りである。

India's Fight for Freedom or the Swadeshi Movement 1905-1906, Calcutta, 1958; *Sri Aurobindo and the New Thought in Indian Politics*, Calcutta, 1964; *Swadeshi Andolan O Banglar Nabayug*, Calcutta, 1961; *Origins of the National Education Movement*, Calcutta, 1957.

特に最後に挙げた著作は力作であり、研究史上に残る傑作と言えよう。

(4) M. N. Das, *India under Morley and Minto—Politics Behind Revolution, Repression and Reforms*, London, 1964. S. R. Wasti, *Lord Minto and the Indian Nationalist Movement*, Clarendon, 1964.
Stanley Wolpert, *Morley and India 1906-1910*, Califor-

nia, 1967.

(5) Amales Tripathi, *The Extremist Challenge: India between 1890 and 1910*, Calcutta, 1967.

(6) Sumit Sarker, op. cit., pp. 507-516.

(7) Ibid., p. 491.

(8) Ibid., pp. 179, 318, 381, 386.

(9) 拙稿「スワデシ運動と中間的土地保有権者層—東ベンガル・バコルゴンジ県の場合—」『アジア経済』第一九卷第六号二三四—四五ページ。

(10) 拙稿「東ベンガル・バコルゴンジ県における民論の形成過程」『南アジア農村社会の研究1』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、一九七七年、五七—八七ページ。

(11) Sumit Sarker, op. cit., p. 381.

二 スワデシ運動初期におけるバコルゴンジ県の組織上の対応

— 祖国友好協会の確立 —

一九〇三年にインド総督カーゾンによって提起されたベンガル分割案は、当初から民族間国民意識に目覚めつつあるベンガル民族の分断を計るものだとして、強い反撥をかっていた。ベンガル分割案が英本国のインド担当大臣の最終的な同意を得たとのニュースがカルカッタの新聞に報じられたのは、一九〇五年六月六日であった。全ベンガルにわたって、急速に分割反対運動が組織されていった。カルカッタのベンガル語週刊紙『シヨンジボニ』⁽¹⁾は、六月一三日号の社説で、分割案が撤回されるまで英国製品をボイコットし、政府機関、官吏と一切の接触を断絶するようベンガル人に訴えた。⁽²⁾この

スワデシ運動における最初のボイコット・アッピールは、熱狂的に迎え入れられた。全ベンガルから代表団を集めて行なわれた八月七日のカルカタ、タウン・ホール集会で、英国世論のベンガル分割措置への無関心に対する抗議として、英国製品ボイコットは全ベンガル・レヴェルの戦術として採択された。ここで注目すべきことは、このボイコット決議が地方における多くの集会で採択された決議に同調して採択されたことである。⁽³⁾この決議が、英国世論に圧力をかけるという限定された戦術として提起された点は、確かに「穏健派」の特徴を明瞭に示している。しかし、地方の多くの集会同調して採択された点は、スワデシ運動がその開始期から、従来のカルカタから地方へという政治運動の流れとは異なり、地方における要求がカルカタにおいて集約され、全ベンガルの意志として確認されるという、新たな方向性を示すものであった。

バコルゴンジ県では、県の行政の中心地ポリシャルから発行されていたベンガル語週刊紙『ポリシャルヒトイシ』⁽⁴⁾がいち早く『シオンジボニ』のボイコット・アッピールを支持した。⁽⁵⁾タウン・ホールの集会の前日八月六日には、ボイコットが県レヴェルでの戦術として採択されていた。同日ポリシャルでは、スワデシ運動を推進していくために、祖国友好協会が結成された。その目的は、バコルゴンジ県民の自力依存と、経済的困難を打開することにあつた。この目的達成のために、六項目の行動計画——(一)紛争を裁判所に持たまず調停により解決すること、(二)インド製品を購買し(スワデシ)、英国製品をボイコットすること、(三)村の衛生状態の改善、(四)青少年の体力向上、(五)禁酒、(六)女子教育の推進——が決定された。⁽⁶⁾

前スワデシ期のバコルゴンジ県の政治組織としては、ポリシャル人民協会 (People's Association, Parisal) ⁽⁷⁾があつた。これは東ベンガル諸県の類似名称をもつ組織と同じく、弁護士、教師、医師、地方名望家(ザミンダール、タルクダールであることが多い)などの政治組織であり、カルカタのインド協会と密接な関係をもち、インド国民会議派 (Indian National Congress 以下コングレスと略記) に代表を送る母体の役割を果たしていた。八月六日、祖国友好

協会が結成された時、これとポリシャル人民協会の関係が問題にされたとは思われない。前年の一九〇四年、ポリシャル人民協会の実質的な指導者であったオッシニークマールドットは、低迷状態にあったバコルゴンジ県の政治状況⁸⁾を立直すべく、二つの措置をとった。一つは、ポリシャルの町でシヴァージー祭を行なったことであり、もう一つは、インド科学工業教育振興協会 (The Association of the Advancement of Scientific and Industrial Education of Indians) の支部を県内に張りめぐらすことであった。それはスワデシ運動初期におけるバコルゴンジの組織的対応を意味する、祖国友好協会の結成を準備するものであったと評価しえよう。

祖国友好協会を指導したのは、従来のポリシャル人民協会の指導者たちであったと思われる。だが注意されているのは、祖国友好協会の組織が、当初から二重構造を成していたことである。すなわち、運動の指導は、「指導部 (Netri Sangha)」にあり、若手活動家は「活動家グループ (Karni Sangha)」を形成していた。⁹⁾「指導部」は、オッシニークマール・ドット (教育家)、タリニクマールグプト (医師)、ホロナートゴーシュ (弁護士)、ウペンドロナートグプ (ザミンダール)、デイノボンドウシエーン (弁護士)、ロジヨニカントダシュグプト (弁護士)、カリプロシヨノグホ (ザミンダール) といった、ポリシャル人民協会の年配の指導者によって構成されていた。一方、「活動家グループ」は、一八人の若手弁護士とオッシニークマールドットの経営するブロジーモホン学院 (Brajmohan Institution 以下BM学院と略記) の教授、教員からなり、ブラフモの同種療法の治療師 (homeopathic doctor) ニシカントゴシュが書記長であった。オッシニークドットは、「活動家グループ」にアドヴァイザーとして関与していた。

「指導部」と「活動家グループ」の人的構成における相違は、世代の相違と、「指導部」にザミンダールが入っているのに対して、「活動家グループ」にはBM学院の教授・教員が数多く加入していること、の二つであろう。「指導部」は長年シュレンドロナートバナジー (Surendranath Banerjee, 1848-1925) らの指導していたインド協会と密接な関係をもっていたから、その政治意識は「穏健派」的なものであったことは疑いを入れない。一九世紀末から二〇世紀初頭にか

けてのバコルゴンジ県における民族運動の停滞は、⁽¹⁰⁾ 彼らの指導性の限界を示しているように考えられる。「活動家グループ」は、こうした傾向に対して危機感をもったオッシニードットの影響下にあった若い世代であり、「過激派」抬頭の時代風潮に敏感な反応を示していたであろう。ポリシャルへのシヴァージー祭の導入は、こうした若い世代の抬頭を示唆するものと理解することができよう。従って、「活動家グループ」は、新情勢に対応しようとするオッシニードットの思想に共鳴する、いわば彼の子飼の家の子郎党集団と言いつける性格をもち、彼がそのアドヴァイザーの位置にいたのは当然のことであった。しかしオッシニードットは、露骨な権力闘争によって、時代に対応しきれなくなった同志を子飼い集団によって排除することを良しとするような指導者ではなかった。それにしても祖国友好協会の結成は、明らかにポリシャル人民協会がスワデシ運動に対応しきれなくなったというオッシニードットの判断から生まれたものであり、彼はポリシャル人民協会の指導者を集めた「指導部」に対して「活動家グループ」を対置し、下からの突き上げによって、運動の指導部に活性を与えようとしたのであった。八月六日の祖国友好協会の結成から一月半ばに至る時期は、運動指導の二元性によって特徴づけることができるのである。

以上に述べたことを、事実によって確認しておこう。スワデシ運動初期において、大規模な集会の開催を決定し、議長についているのは「指導部」の年配活動家であった。しかし、官報への分割布告の掲載（九月一日）に抗議して行なわれた九月三日のポリシャル集会で決議を動議あるいは支持したのは、「活動家グループ」に属する中堅の活動家であった。⁽¹¹⁾ このような役割分担によって指導の二元性が維持されていたのである。また九月の末、オッシニードットは英国製品のボイコットを長期的に維持させる目的をもって、バコルゴンジ県の商業の中心地ジャロカティ(Jalakati)に赴く⁽¹²⁾。その時彼に同伴したのが、「指導部」の二人、タリニクマールグプトとウペンドロナートシエンに、若手のBM学院の教師シロットクマールラーイ、『ビカシュ』(ベンガル語週刊紙。オッシニードットの宣伝機関)主幹プリヨナートグホ及び弁護士のもとウラナートシエンであった。⁽¹²⁾ このようにオッシニードットは、「指導部」に「活動家グル

「プ」あるいはその周辺の人物をかみ合わせることによって、運動の展開を計ったのである。ところで、この時期のオックスニードットの演説は、政府に嘆願を繰返す政治運動のあり方（「穏健派」的）は分割をめぐる状況の中で破産してしまつたと述べる（八月九日のポリシャルの卸売商人の集会——Mahajan Sabha——での演説¹³）など、「穏健派」的傾向から遠ざかっていくのが窺われる。

二元的指導体制下にあつたといふものの、この時期バコルゴンジ県の運動は大きな伸展をとげていた。県内の商業の中心地であるジャロカティとポリシャルの大卸売商は、英国製品ボイコットに向けて組織された¹⁴。そればかりでなく、たとえば、ジャロカティの有力卸売商が周辺の小規模の商業センターに働きかけるといった動きも出ていた¹⁵。サービスカーストないし特定職業集団——洗濯人、床屋、オリヤの家事使用人、娼婦——が個別的に英国製品のボイコット決議違反者に対するサービスの停止を誓約していた¹⁶。運動は盛上り、前述した九月三日のポリシャル集会には一万二千人もの人が参加したと報告されている。因みに、一九一一年国勢調査時におけるポリシャルの人口は、二万二四七三人であつた。その日降りしきる雨の中をデモに参加した人々は、傘もささず裸足で行進したのであつた。こうした運動の昂揚は他県でも見習われるべきだと多くの新聞が指摘した。たとえば、シュレンドロナートバナージの英字日刊紙『ベンガリー』は同様の指摘を行なつたあと、バコルゴンジ県の状況を次のように要約している。「事実、運動はバコルゴンジでは非常に深く根づいているので、スワデシ運動に心から参加したいと思わないような農民は、ここでは見かけることができない。（中略）他ではともかく、この県では運動は大衆をつき動かしている。」¹⁷

バコルゴンジ県におけるスワデシ運動が急速な伸展を示し、全スワデシ運動の焦点を形成する観を呈するとともに、それは知事(Lieutenant-Governor)のバンプフィールドフラー(Bampfylde Fuller)治下の東ベンガル・アッサム州の新政府の攻撃の的となることは必至であつた。新州政府はまず、全東ベンガルにわたって、学生・生徒の政治運動参加の禁止、愛国的シュプレヒコール「バンデー・マートラム」を街路で叫ぶことの禁止などを内容としたライオン通牒（一〇月

一六日)、教育通牒、バンデー・マートラム通牒(ともに一月八日)を發して、スワデシ運動の抑圧にとりかかった⁽¹⁸⁾。バコルゴンジ県では一〇月の末、英国製品の荷揚をめぐって県北のゴウルノディで騒動が生じ、県治安判事ストリートフイーールドが現場に急行している。⁽¹⁹⁾ 一月の第二週には、ストリートフイーールドは、教育通牒、バンデー・マートラム通牒を公布するために、県西のバナリパラ村に出かけた。特にこの時期には、スワデシ運動は県中央・北部・西北部のヒンドウ中間層(イギリス人官僚用語ではボッドロロク——*Bhadralok*)の集中する地域で展開され、バナリパラはクリンカヤスト(*Kulin Kayashta*)の集中する村として有名であった。県治安判事の到着した晩に一騒動があり、ストリートフイーールドはそれに参加したかどで、生徒と教師あわせて三人の放校を命令した。翌朝生徒たちは、嫌疑は的外れであると騒ぎ出し、土くれがバンデー・マートラムの叫びとともに、県治安判事に向かって投げつけられるという事件が起こった。⁽²¹⁾ これをきっかけとして、バナリパラにはグルカの懲罰警察隊が駐屯することになった。以後こうした些細な事件を口実に、グルカの懲罰警察隊が県内の様々な場所に駐屯し、その駐屯費は住民負担となり、問題を引起していくことになる。⁽²²⁾

最後に一月一日、知事(Lieutenant-Governor) フラー自身がポリシヤルに乗込んで来た。それに先立つ一月七日、「指導部」の五人の指導者、オッシニークマールドット、ディノボンドウシェーン、ウペンドロナートシェーン、カリプロシジョンノグホ、ロジヨニカントダシユグプトは、県民に英国製品のボイコットの合法性を主張し、自国品愛用を勧め、運動の進め方を指示し、村々に人民協会(People's Association)を設立するように呼びかけたアップールを⁽²³⁾發表していた。アップールは、スワデシ運動の拡大深化を意図する反面、ザミンダールあるいはその使用人が、スワデシ誓約をすることを拒否したり違反するものに罰金を課したりすべきではないと強調し、運動が強制ではなく、説得によって推進されるべきだと主張している。また根拠のない噂を流して運動への参加を呼びかける者はむしろ運動の敵であり、正義なくしては進歩はないとも述べている。これは運動初期においてザミンダール権力を利用して運動を拡大しようとする傾向がかなり広範に見られたこと、それに対してポリシヤルの指導部がそうした拡大は結局運動の大衆的基盤

を損うものであり、運動は倫理的正当性を保持し、秩序だつて展開されるべきだと考えていたことを示すものと言えよう。ここには、「真実、愛、純潔」という倫理的綱領をかかげて、中間層の民族運動への結集をはかつてきたオッシニー・ドットを指導者とする、バコルゴンジ県の政治運動の特徴が鮮明に現れている。

しかしポリシャルに乗込んで来たフラーは、このアッピールが国家元首あるいはその代理人のみが発布しうる布告であり、提案されている人民協会は、公安委員会に他ならず、許容の限度をこえるものと極めつけ、五人のアッピール署名者を自分のステイマーに呼び出し撤回を迫った。鞭を手にしたフラーの前に並んだ五人の指導者は学校の生徒のようであつたと、オッシニー・ドットの伝記作者は述べている。⁽²⁴⁾ 指導者たちの釈明に耳を貸そうともせず、フラーはアッピールを撤回するか否か、回答を一人一人に要求していった。四人の指導者が撤回する旨答えるのを聞いたオッシニー・ドットは、最後に、彼らの撤回への同意に異存はないと述べた。こうしてフラーとの会見は、「指導部」五人のアッピール署名者の全面的屈伏という形で幕を閉じた。⁽²⁵⁾

知事のステイマーでの会見を河岸で息をひそめて待機していた人々は、こうした結果に強い不満を表明した。この事件を、ブランモバンドブ・ウパッターエの急進的ベンガル語週刊紙『シヨンダー』は次のように論評した。「オッシニー・バーブーはまたとない機会を逸した。もしバーブーがフラー氏のステイマー上で布告(アッピール)を撤回しなかつたら逮捕されたことであろう。そして怒りの炎が国中に燃え上つたことだろう……」⁽²⁶⁾ しかし後年、ビピンチョンドロ・パールは、『シヨンダー』とは対照的な評価を与えている。「……そして知事をこの全く馬鹿げた行為(オッシニー・ドットの逮捕)に追いつむことは、全世界の前で知事を罪に陥れることになるだろうと彼(訳註オッシニー・ドット)は知っていた。デマゴグタイプ政治家にはそうしてしまいたいという誘惑はとどめがたいものであつたらう。だがオッシニー・クマールはデマゴグではない。オッシニー・クマールがもし自分の人民の平和や幸福よりも個人的名声を大切にしたいとするなら、バンプフィールド卿(フラー)の脅迫に屈することはなかつたであらう。そしてその結果は、ベンガルの他地域

とは言わないまでも、ポリシャルと全バコルゴンジ県にわたる怖るべき騒擾となったであろう。それを鎮めるには容易ならぬ流血を見ないでは済まなかっただろう。オッシニークマールはそれを洞察し、彼の県の平和のために、バンプフィルド卿の不法な命令に対して服従を同意することにより、勇気をほめ称えられる機会をためらいなく犠牲にしたのである。そして人民の指導者にとって決してたやすいことではないこの犠牲は、当時のポリシャルの状況を救ったのである。⁽²⁷⁾

ではなぜ、オッシニードットはフライーに屈伏せざるを得なかったのであろうか。ビピンパールの評価は心理分析的であるが、さすがにオッシニードットの指導者としての性格を射当てている。しかし、この屈伏は当時のバコルゴンジ県の運動における組織上の弱さ、さらに限定していえば、運動の指導における欠陥に結果するものと考えの方がよさそうである。「指導部」と「活動家グループ」に運動の指導が二元化していたこと、しかも名目的には指導の最終的責任を担っていた「指導部」が、フライーの恫喝の前にはなんらなすすべもなかったことは、植民地政府の弾圧的措置に対抗しなければならぬという新しい情勢下では、二元的な指導体制は不十分であること、「指導部」による指導は清算されるべきことを明示していたのである。

現にこの十一月五日のフライーとの会見後、「指導部」は独立の機関として運動を統轄する機能を失った。オッシニードットは「活動家グループ」に正式に加入した。こうして、運動指導の一元化が「指導部」の消滅と「活動家グループ」の指導権獲得によって実現されたのである。オッシニードットの伝記作者の一人、シヨロトクマール⁽²⁸⁾は、「活動家グループ」を当初から祖国友好協会と同一視しているが、実は二つが同一視されるのは、一九〇五年十一月半ばの段階であったのである。「指導部」から「活動家グループ」への運動指導権の移動は、バコルゴンジ県における「穏健派」的運動論から「過激派」的運動論への推移と見合う動きであった。また、運動指導一元化の実現こそ、祖国友好協会の確立、すなわち前スウェシ期からスウェシ期への組織上の対応の完了を告げるものであり、それはバコルゴンジ県におけるスウェシ運動の強力な展開を可能にする基本的な条件となったのである。

註

- (1) シャダロン・ブラフモ・サマージ系のベンガル語週刊紙。インド協会の熱心な活動家であったクリシュノクマル・シツトロ (Krishnakumar Mitra, 1852-1936) が編集主幹であった。
- (2) Sanjivani, 13 July 1905, Report on Native Papers (Bengal) — RNP(B) — for the week ending 22 July 1905.
- (3) Haridas & Uma Mukherjee, *India's Fight for Freedom or the Swadeshi Movement 1905-1906*, op. cit., pp. 40-49.
- (4) ドゥルガモホン・シェーン (Durgamohan Sen, 1877-1972) によって、ボリシャルで半世紀にわたって刊行されたベンガル語週刊紙。スワデシ期には、祖国友好協会の機関紙的役割を果たした。ドゥルガモホン・シェーンは同協会の有力な会員の一人であった。
- (5) *Barisal Hitaisi*, 19 July 1905, RNP(B) for the week ending 29 July 1905.
- (6) 一九〇八年八月一七日に行なわれたボリシャル県民大会において、シヨティシユチョンドロ・チャタジーが読みあげた祖国友好協会の報告による。Home (Political) A No. 104, October 1908. 次の報告も参照のこと。Second and Third Annual Proceedings of the Swadesh Bandhab Sammilani (sic). Home (Political) Deposit No. 13, July 1909.
- (7) 人民協会については、拙稿「インド民族運動形成期における地方活動家—東ベンガルの場合—」『アジア研究』第二六巻第三号、一四ページを参照されたい。
- (8) 前掲論文二二—二四ページ。
- (9) Sharatkumar Ray, *Mahatma Aswinikumar*, Calcutta, 1334 B. S., pp. 169-172; Sureshchandra Gupta, *Aswinikumar—Swargiya Aswinikumar Datter Jiban Carita*, Barisal, 1335 B. S., pp. 398-399.
- (10) 本節註(8)を参照されたい。
- (11) 'Banga-bibhag', *Barisal Hitaisi*, 6 September 1905.
- (12) 'Emni Cai' and 'Deshar Kaj', *Bikash*, 1 October 1905.
- (13) 'Aswini Babur baktrita', *Barisal Hitaisi*, 16 August 1905, 30 August 1905, 6 September 1905.
- (14) *Bengalee*, 24 September 1905; *Bikash*, 1 October 1905.
- (15) *Bikash*, 1 October 1905.
- (16) *Bengalee*, 24 September 1905.
- (17) Ibid.
- (18) Haridas & Uma Mukherjee, *India's Fight for Freedom or the Swadeshi Movement 1905-1906*, op. cit., pp. 98-99. *Amrita Bazar Patrika*, 14 May 1905, *Barisal Hitaisi*, 3 November 1905, RNP (B) for the week ending 11 November 1905.

- (61) *Kashipur Nibashi*, 1 November 1905, RNP(B) for the week ending 11 November 1905. Cronin, *British Policy and Administration in Bengal, Partition and the New Province of Eastern Bengal and Assam*, Calcutta, 1977, p. 65.
- (20) 'নাচারিলাহাৰু প্ৰচাৰিত্ৰী'। Manindrakumar Ghosh, 'Amar Gramer Nam', in *Samayiki*, Calcutta, 1384 B. S., pp. 13-15. (23) *Statesman*, 2 December 1905.
- (21) 'The Situation in Eastern Bengal', *Statesman*, 2 December 1905. (24) Sureshchandra Gupta, op. cit., P. 394.
- (22) *Amrita Bazar Patrika*, 19 February 1906, Report on Native-owned English Newspapers (Bengal) — RNEP (25) *Ibid.*, pp. 393-396.
- (B) — for the week ending 24 February 1906.; R. P. (26) *Sandya*, 24 November 1905, RNP(B) for the week ending 2 December 1905.
- (27) Bipinchandra Pal, *Character Sketches*, Calcutta, 1957, p. 55. (28) Sharatkumar Ray, op. cit., p. 172.

三 スワデシ運動組織の展開——スワデシ運動における祖国友好協会

一九〇五年一月末の祖国友好協会の確立に先立つ時期の組織上の問題は二つあった。一月七日の「指導部」のアップールでは、各村に結社 (samiti) を設立し、その責任者 (secretary) の名前をオッシニー・ドットの許に知らせるようにとの要請がなされている。村落における政治結社は、その時点ではまだ形成過程にあったと考えられる。しかし、スワデシ運動の開始に伴い、すでにかかなりの数の村落政治結社が独自に形成されていたのであるが、それらはポリシャルの「指導部」の統制外にあった。これらをどう統合していくかが第一の問題であった。第二に、祖国友好協会は財政ピンチに陥っていた。ポリシャルのような小さな町で集められる運動資金は限られていたし、それも減少する傾向にあった。こうした状況下で、『ピカシユ』は二月のはじめ、各村の政治結社が集めた運動資金の剰余金をオッシニー・ドットの許に送ってほしいと訴えていた。⁽¹⁾ 祖国友好協会の指導の一元化によって、村落政治結社を統制下に組込む作業が急速に伸展

した。祖国友好協会は一六三の村落政治結社から報告書を受理した。⁽²⁾

祖国友好協会の特徴は、二種類の政治組織——前スワデシ期の人民協会 (People's Association) とスワデシ期の結社^{シヨミテイ} (samiti)——の性格を兼ね備えていたところにある。

前スワデシ期の人民協会が時代遅れとなり、スワデシ運動の推進母体として機能しえないものになっていたことは、すでに前節で指摘した。しかし、東ベンガルの他県では、人民協会のヴェテラン指導者がスワデシ期においても依然として一定の役割を果たしていたことは、モイモンシンフ (Mymensingh) のオナートボンドウグホ、ダッカのアノンドチヨンドロラーイ、フォリドプル (Faridpur) のオンビカチヨロンモジユムダールの名を挙げるだけでも否定しがたい事実である。

しかし彼らの活動と同時に、モイモンシンフではシュリドシヨミテイ (Subrid Samiti)、シャドナシヨミテイ (Sadna Samiti)、ダッカではオヌシーロンシヨミテイ (Anushilan Samiti)、フォリドプルではフォリドプルシヨミテイ (Faridpur Brati Samiti) といった、スワデシ期を特徴づける結社^{シヨミテイ}が、人民協会とはほとんど関係を持たず活動を行っていた。これらのシヨミテイは、ベンガル分割の二、三年前に創設され、その課題として、(一) 会員の体力の向上、(二) 会員の宗教的・道徳的向上、(三) 社会奉仕、(四) 統一と組織の拡大、を掲げていた。⁽³⁾

これを前節で紹介した祖国友好協会の課題と比較すると、(一) は共通することが明らかである。しかし祖国友好協会では、(二) の課題が禁酒という具体的目標があげられているだけで、全面的に宗教的・道徳的向上をうたっていない。これは一つには、この二つの課題がポリシャルではなくてBM学院を通じて活動家の中に滲透していたためだと考えられる。祖国友好協会の諸活動は、BM学院をぬきにしては理解しえない面がある。それはまず、BM学院が、他の結社^{シヨミテイ}では自らが負担しなければならなかった会員の訓練をすでに完了し、一定の自覚と能力をもった一般活動家を運動の場に送りえたこと、また教授スタッフの中から祖国友好協会に指導的活動家を供給しえたことに求められる。祖国友好協会が会員

の宗教的・道徳的向上を全面的にうたわないもう一つの理由は、この組織がスワデシ運動の開始に伴い、それに対応するために設立された全体的政治結社だったからである。

それ故、他の結社が取上げた社会奉仕は、バコルゴンジでは別の組織が行なうことになった。一九〇六年、東ベンガル一帯に生じた飢饉に際して、政治組織としては有名無実になっていた人民協会が救済機関として利用されたのである。オツシニーードットは、人民協会の事務長 (secretary) として飢饉救済活動を取りしきったが、それに従事した人々は祖国友好協会の活動家であった。しかし少くとも形式的には、社会奉仕を行なう人民協会とスワデシ運動を行なう祖国友好協会と、組織上の区別が存在したのである。⁽⁴⁾

こうしてスワデシ運動を通じて、祖国友好協会は、各結社シヨミテイに共通する第四の課題——統一と組織の拡大——すなわち政治的課題を追求する唯一の組織として機能しえたのである。ダッカのオヌシーロンシヨミテイは言うに及ばず、他の結社シヨミテイは地下活動を行なう秘密結社へと転化する傾向があり、大衆運動を推進するという公共的性格に欠けていた。祖国友好協会は、前スワデシ期の公共的政治団体である人民協会を組織的に乗り越えたところに成立したため、人民協会の全体的・公共的性格を継承し、秘密結社とは相容れない性格をもっていた。東ベンガルの他県では、人民協会と結社が有機的な関連をもたず、方向の異なる運動指導を行なったのに対し、バコルゴンジ県では、人民協会と結社が運動の初期に統一され、一元化された指導体制下に、スワデシ運動がかなりの程度大衆運動として展開される基盤が形成されたのである。

祖国友好協会の確立に伴い、村落政治結社の統合化が進められたことを指摘したが、ポリシャル中央と地方支部の関係はかなり緩やかなものであった。村落政治結社の中には、ポリシャルに報告書を送らないものもあった。各村落政治結社は独自の組織であり、結社名も自由に選ぶことができた。⁽⁵⁾ たとえば、バナリパラの結社シヨデシユシホクシヨミテイは祖国奉仕者団 (Swadesh Sebak Samiti)、ダムラ (Dhamura) の結社シヨデシユシヒトイシニシヨバは、祖国福祉会 (Swadesh Hitaishini Sabha) を名乗った。一九〇八年八月までに、ポリシャルの祖国友好協会の統轄下に入った支部数は一五九であった。⁽⁶⁾ 祖国友好協会には、執行委員会 (Execu-

スワデシ運動における組織について

ive Committee) 一般委員会 (General Committee) があり、同じく執行委員会をもつ地方の結社は、ポリシャル中央の指示を受容れ活動していた。

バコルゴンジ県のスワデシ運動は、一九〇六年四月ポリシャルで開かれたベンガル州協議会 (Bengal Provincial Conference) に向かつて高まる。一九〇六年六月以降、年末までは、飢饉救済活動が自力依存のスワデシ精神を振う実践の場となった。しかしそうした中でも、八月には県民大会が開催され、スワデシ運動の総括と活動方針が確認されるなど、政治運動の推進にも十分配慮がなされていた。一九〇六年のコンGRES、カルカッタ大会に至る時期は、バコルゴンジ県のスワデシ運動にとっては一つの危機であった。運動は弛緩し、英国製品ポイコットが困難になる状況であった。祖国友好協会の活動家は、この時期を、ポイコット誓約違反者に対する社会的ポイコットを強化することで切抜けようとした。こうして一九〇七年春から、運動は再び上げ潮となり、一九〇七年半ばに最高潮に達した。

一九〇七年四月一日、祖国友好協会は運動の公開的・全県的性格を強めるために、デイスワクトシヨミテイ 県協会の設立準備小委員会を設けた。⁽⁹⁾ そのメンバーには、オッシニードット (BM学院)、シヨティシユチヨンドロ||チャタジー (BM学院)、ニバロンチヨンドロ||ダシユグプト (弁護士)、シヨロットチヨンドロ||グホ (弁護士)、ウペンドロ||ナート||シエーン (ザミンダール)、タリニクマール||グプト (医師)、ドウルガモホン||シエーン (『ポリシャル||ヒトイシー』紙主幹) の七人が選出された。祖国友好協会の一般委員会は、七四名のメンバーで構成されていた。その内訳は、BM学院関係者一七名、法律家 (ukhil 及び mukheer) 二五名、ザミンダール八名、医師五名、専従活動家二名、ジャーナリスト二名、給与勤労者六名、その他一名であった。従って県協会設立準備小委員会の構成——BM学院関係者二名、弁護士二名、ザミンダール・医師・ジャーナリスト各一名——は、一般委員会の職能的構成を忠実に反映するものであった。祖国友好協会の会長は、オッシニードットであり、書記長はBMカレッジの数学教授シヨティシユチヨンドロ||チャタジー (一八七三—一九三八。一九〇一年以来BMカレッジの教授) であつた。⁽¹⁰⁾ ポリシャルの指導者たちは、オッシニードットあるい

はB M学院のスタッフの影響があまりにも強い祖国友好協会の私的性格を払拭し、選挙制度を導入し、全県の公認政治団体へと祖国友好協会を発展的に解消することを、運動の次のステップに設定した。すでに一九〇五年一月段階で、『ピカシュ』は、県協会の存在しないことをバコルゴンジの運動の欠陥であると指摘していた。⁽¹¹⁾

一九〇八年八月一七、一八日の両日にわたって行なわれた県民大会 (Bakarjanj District Conference) では、県協会設立に関する重要決議が採択された。カルカタ高等裁判所の弁護士 (ukhil) であり、オッシニードットの『信愛の道』 (Bhaktiyoga) の英訳者であるグノダチヨロンシェーン (Gunadacaran Sen) が提案した、同大会の第一六決議は次のように述べている。「愛国的活動を遂行するために、選挙による県協会が形成されなければならない。この県協会の結成の任務は祖国友好協会に一任されるべきである。祖国友好協会は三郡 (中央を除く、ピロジュプル、ポトウアカリ、ボトラの三郡) とジャロカティと相談した上で、問題を解決することになろう。」この動議を支持して、ウペンドロナートシェーンは県協会のプランを詳述した。「各村には、全てのカーストの代表者からなる村会 (village samiti) がなければならない。その会員は年間四アンナの最低会費を納入しなければならない。村会からの代表と郡庁所在地からのメンバーによって、郡協会 (subdivisional samiti) がつくられるであろう。また県協会 (District samiti) は、郡協会からの代表と県庁所在地からのメンバーから形成されることになろう。」⁽¹²⁾

「バコルゴンジ県内深くひろがる運動組織は、東ベンガル・アッサム州の他のいかなる県に見られる組織よりも卓越している」⁽¹³⁾とは、政府筋によっても広く認められていた事実だが、シヨミティの全構造が十分に発展していたとは言いがたい。県協会の設立は提起されたが、現実には、村会から郡協会を経て県協会に至る選挙制度の上に立つ代表システムは、課題のままにとどまっていたのである。祖国友好協会の自然発生的な村落政治結社への統制機能は、ポリシャルが行政上の中心地であるという場所の重要性と、オッシニードットと彼が育成した一団の優秀な活動家集団の声望に基くものであり、正式の手続きを踏んだものではなかった。その上、一九〇八年八月になると、スワデン運動は明らかに退潮期に入

っていた。一九〇八年七月前半のインド政府の「ベンガル分割反対運動に関する隔週報告」は、「今月の前半は、運動についてはほとんどなにも聞かれない」と述べている⁽¹⁴⁾。その月の後半には、東ベンガル・アッサム州知事は、教育のあるベングル人たちの上層の多くは、運動に倦み疲れていると信じてよい根拠がある、と情況報告を行なっている⁽¹⁵⁾。一方では、一九〇八年に入るとスワデシ運動には新しい傾向が現われた。東ベンガルでは、「闘争と不穏は表面上は明らかに減っているが、一方で結社およびヴォランティアたちの団体という形での秘密組織の勢力拡大があり、つまるところ強盗その他の手段によって、武器・弾薬・資金の強奪をこととするギャングが発生している。そしてそうした準備はより活発な行動に向かって精力的になされているのである」⁽¹⁶⁾。こうした状況下では、オッシニー・ドットが県民大会で述べたように、合法的に運動を展開するのは非常に困難であった。県民大会における県協会設立の決議は、秘密組織の滲透から公然運動組織を防衛し、スワデシ運動の全県民性・公共性を維持し、大衆運動としての性格を貫徹することを意図したものであったといえよう。それ故に、県民大会の議事を報告した警部J・ボウミック(J. Bhauwick)は、選挙による県協会の形成に関する決議に政府の注意を促して、次のように述べている。「もし政治運動が、これらのショミティによって行なわれるようになった暁には、政府は一握りの教育を受けた人間の活動として無視することはできないであろう」⁽¹⁷⁾。

一九〇八年一月三日のオッシニー・ドットの逮捕に先立つ二、三ヶ月間の情勢は、ある政府文書によれば、「プリン主義(ダッカ)オヌシーロン・ショミティのプリンビハリ・ダーシュの指導するテロリスト運動を指す」はポリシャルに根を下しつつあり、それはオッシニーの没落と、より暴力的なショティシュ(ショティシュ・チョンドロ・チャタジー)の影響力の増大を招いている⁽¹⁸⁾。と総括されている。事実この時期、オッシニー・ドットは、「過去二、三ヶ月の暴行とダコイティ(強盗)を批難し、末端活動家(ヴォランティエアズ)の行為には欠陥が認められると述べていた」⁽¹⁹⁾のである。こうした状況下で、県協会の設立計画書が県内に回覧されていた。しかしそれが実現に移される前に、オッシニー・ドットとショティシュ・チャタジーは逮捕され、ベンガル外に拘禁されたのである。

インド政府は当初、「シヨティシユルチャタジーがシヨミティ〔祖国友好協会〕の中心人物であり、オッシニードットが公然たる指導から手を引いてから〔糖尿病の悪化したオッシニードットは、一九〇八年の前半をボンベイ近くの保養地マテラン (Matheran) で過ぎなければならなかった〕、彼の影響力はますます顕著なものになってきた⁽²⁰⁾」との判断から、シヨティシユルチャタジーの逮捕だけを考えていたが、最終段階でオッシニードットも逮捕者リストに加えられた。その理由は以下の通りであった。「バーブー⁽²¹⁾オッシニークマールドットは、事実においても名義においても、バコルゴンジに不穩を長引かせ騒擾を準備しつつある二つの組織〔祖国友好協会とBM学院〕の代表者であり続けている。そして二つの組織の活動は、彼が指示し統御しているのである……」⁽²¹⁾政府が何より怖れたのは、BM学院を一翼として形成された祖国友好協会の組織力であった。しかしすでに見て来たように、祖国友好協会は秘密組織とは対立する公開の大衆組織であった。政府は、祖国友好協会がダッカのオヌシーロン⁽²²⁾シヨミティなどとは違ってダコイティを行うような団体ではないと、現状分析的にはこの点を認めつつも、祖国友好協会も究極的には「イギリス〔植民地〕政府に対する蜂起のために意図され訓練された革命組織」と見做し、祖国友好協会がダコイティや暴力の方向に向けて活動を展開していくのは、その指導者が排除されない限り「時間の問題」であると結論したのである。⁽²²⁾

オッシニードットの排除は、テロリスト運動取締りの措置としては、的外れでしかなかった。テロリストのスワデシ運動への滲透に対して防壁の役割を果たしていた祖国友好協会の指導者、オッシニードットの排除は、テロリスト運動が拡大するきっかけとなるものであったからである。事実、一九〇八年末から、テロリスト運動はバコルゴンジで急速に力を増していく⁽²³⁾。しかし、テロリスト運動弾圧にかこつけて、長期的にみればイギリス統治体制に対するより重大な脅威となりうる大衆運動組織を、その指導者の排除を手始めにとりつぶしていったことは、植民地政府にとっては決して的外な措置ではなかったといえよう。

一九〇九年一月五日には、祖国友好協会は東ベンガルの他の四つのシヨミティともども、一九〇八年のインド刑法改正

法 (Indian Criminal Law Amendment Act, 1908) の第一六条に触れる危険な団体として解散させられたのである。祖国友好協会はこの弾圧措置に対して何ら有効な対応策を立てえぬまま、解散通知を会員及び傘下シヨミティに発送し、その本部の建物は売却に付された⁽²⁴⁾。シユミットシヨルカールは、祖国友好協会が弾圧措置に対する組織的防衛策を講じられなかった点に重大な限界を見出しているが、このことは組織論的には次のように説明されよう。(一)祖国友好協会がオツシニードットという強力な指導者の権威にかなりの程度依存し、それによって効果的な運動を展開しえたが、同時にまたその限りにおいて私的な要素を強く残していたこと。(二)この弱点は十分に意識され、選挙制を導入した全県組織の確立によって克服が試みられたが、その実現に先立って弾圧が行なわれ、組織が破壊されたこと——以上の二点を留意する必要がある。

祖国友好協会の崩壊とともに、バコルゴンジ県におけるスワデシ運動はその幕を閉じたと言っても過言ではない。この節を終えるに当たって、第一次非協力運動に至るバコルゴンジ県の政治運動組織について概観しておこう。

「オツシニークマールドットの追放中、彼の同僚たちは、故ウペンドロナートシユーンの指導下に県協会すなわちジラーシヨミティ (Zilla Samiti) を設立した⁽²⁶⁾」とオツシニードットの伝記作者は述べている。この県協会についての情報は極めて限られており、一九〇七年から八年の間に計画された県協会とどのような関係に立つのかさえ明らかではない。ただ選挙制を導入した村会から郡協会を経て県協会に至る整然とした組織が実現されなかったことは確かである。このウペンドロナートシユーンの県協会は多分に名目的なものであったらしい。一九〇九年三月一日、ポリシャル人民協会の小会合がポリシャルで開かれた。席上ウペンドロナートシユーンは、「實際上全てのシヨミティが消えてしまっているから、この協会の活動が受容られなければならないと提案したが、提案は温かくは迎えられなかった⁽²⁷⁾」のである。従ってこの時点では、県協会の設立は考えられておらず、ウペンドロナートシユーンは人民協会を再び政治組織として用いようとして提案したのである。しかしスワデシ運動を経た時代環境下では、それは時代錯誤的なものとしてしか受取

られなかった。

一九〇九年八月二二日に、県協会はポリシャルのウペンドロナートロシェーンの邸宅で行なわれた会合で発足した⁽²⁸⁾。シエーンが会長に選ばれ、ニバロンチョンドロダシュグプトが書記長に就くように要請された。しかし彼は要請を固辞して受容れなかった⁽²⁹⁾。ニバロンチョンドロはこの時点で政治的姿勢をずっと後退させ、活動家と政府との仲介役を買って出たようである。一九〇九年一月二〇日の『ポリシャルヒトイシ』は、こうしたダシュグプトを皮肉って、「彼は最近人民のことにもたいして関心を持つていないし、政府の好意を得ることに成功していない⁽³⁰⁾」と述べている。このようにウペンドロナートロシェーンの県協会は、祖国友好協会の矮小化されたレプリカでしかなかった。

一九〇九年、戦闘性を喪失したスワデン運動は、運動の弱点が大衆把握の弱さにあったとして、運動の目標を政治的課題から、衛生状態の改善、下層カーストの地位向上などの社会運動に移そうとしていた⁽³¹⁾。一九〇九年六月一九日、ジャロカティで開かれたポリシャル県民大会におけるJ・チョウドリの演説は、運動の側から同じ指摘を行っている。

ウペンドロナートロシェーンの県協会が、政治的には著しく後退した前提に立って設立されたことは疑いがない。一九一〇年二月、追放を解除されポリシャルに戻って来たオッシニードットは、この県協会の会長に就任し、(初等)教育の普及(小学校——lower primary school——を村々に設立していくことを中心とする)と衛生状態の改善に努力を集めていくことになる。ここで注目されるのは、オッシニードットが教育問題より衛生状態の改善を重視していることである。一九一三年、ダッカで行なわれたベンガル州協議会の議長となったオッシニードットは、衛生、排水、水供給の問題をとりあげて次のように述べた。「これらの問題は教育の問題より更に重要である。生きることが先であり、教育は二の次である⁽³²⁾」オッシニードットがスワデン運動の限界を大衆を動員できなかった点に求めていることは明らかであり、今後の政治運動は大衆の欲求に則した地点から開始されなければならないと考えていたことが、ここで確認されよう。

だがこの頃、時代は余り目につかない所で転換しようとしていた。一九一五年には、バコルゴンジの農村部で幾つかの農民集会が開催されていた。⁽³³⁾三〇年代の農民大衆党(Krishak Praja Party)の設立へと接続して行くこの耕作農民上層の政治舞台への登場は、彼らの問題がもはや中間層ミッド・クラスの上からの働きかけによつてではなく、自らの手で解決を計つていくという、新しい局面を切開いていくものであった。こうした下からの新しい動きを伴ひ、第一次非協力運動の中で、⁽³⁴⁾県協会は、一九二〇年に設立された कांग्रेसのバコルゴンジ支部(Congress Committee)に吸収せられたのである。

註

- (1) 'Swadeshi Andolan', *Bikash*, 5 November 1905.
- (2) 'Swadeshi in Bakarganj', *Punjabi*, 19 September 1906.
- (3) Home (Political) Deposit A Nos. 135-147, May 1909.
- (4) 人民協会が開いた救済センターの数は一六一であり、これは祖国友好協会の支部数一五九(あるいは一六二)とはほぼ一致するものであった。
- (5) Object of village association and its method of working, Swadesh Bandhab Samiti, Barisal, Part II, No. 18, Home (Political) Deposit No. 2, April 1909.
- (6) Part II, No. 11-X, Home (Political) Deposit No. 13, July 1909.
- (7) Fortnightly Report regarding the anti-partition agitation in Eastern Bengal and Assam (以下 F. R. と略記) during the first half of August, 1906, Home (Political) B. No. 13, October 1906.; 'Barisal District Conference', *Bengalee*, 18 September 1906.
- (8) F. R. during the second half of November 1906, Home (Public) A No. 152, February 1907.
- (9) 本節註(6)と同。
- (10) H. LeMesurier to the Secretary to the Govt. of India, Home Dept., dated 10 December 1908, Home (Political) Deposit No. 6, November 1909.
- (11) 本節註(1)と同。
- (12) Report of Inspector of Police, J. Bhaumik, on the proceedings of the Bakarganj District Conference, Home (Political) A. No. 104, October 1908.
- (13) P. C. Lyon, Chief Secretary to the Eastern Bengal and Assam, to the Secretary to the Govt. of India, dated Shillong, 15 September 1908 (Confidential), Home (Political) A No. 104, October 1908.
- (14) F. R. for the first half of July 1908, Home (Political) A No. 38, September 1908.
- (15) F. R. for the second half of July 1908, Home (Political) A No. 42, September 1908.

- (29) F. R. for the second half of September 1908, Home (Political) A Nos. 59-60, January 1909.
- (30) Report of Inspector, J. Bhaumik, on the proceedings of the Bakarganj District Conference Home (Political) A No. 104, October 1908.
- (31) R. Nathan to H. LeMesurier, dated 9 December 1908, Home (Political) Deposit No. 2, April 1909.
- (32) F. R. for the first half of December 1908, Home (Political) A. No. 104, January 1909.
- (33) H. LeMesurier, Offg. Secretary to the Govt. of Eastern Bengal and Assam, to the Secretary to the Govt. of India, Home Dept., 9 December 1908, Home (Political) A Nos. 137-199, February 1909.
- (34) Same to same, 10 December 1908, Home (Political) A Nos. 137-199, February 1909.
- (35) Ibid.
- (36) F. R. for the second half of August 1908, Home (Political) A No. 104, October 1908; F. R. for the second half of November 1908, Home (Political) A No. 94, January 1909; F. R. for the second half of December 1908, Home (Political) A No. 32, February 1909.; Arunachandra Guha, *First Spark of Revolution*, Calcutta, 1971, pp. 242-243.
- (37) F. . during January 1909, Home (Political) A Nos. 104-105, March 1909.
- (38) Sumit Sarkar, op. cit., p. 389.
- (39) Sureshchandra Gupta, op. cit., p. 317.
- (40) History Sheet No. 62, Durga Mohan Sen, West Bengal State Archives.
- (41) Ibid.
- (42) History Sheet of Nibarān Chandra Das Gupta, West Bengal State Archives.
- (43) History Sheet of Durga Mohan Sen.
- (44) イギリス側からの観察として、*Englishman* のボクシヤン県民大会のレポートの記事や参照された。雑誌は一九〇九年六月二十五日時の *Bengalee* に掲載されたものを使用した。
- (45) 'Baktrirabali', p. 56, in "Aswinikumar Racanassam-bhar" Calcutta, 1374 B. S.
- (46) Humaira Momen, *Muslim Politics in Bengal*, Dacca, 1972, p. 38.
- (47) Hiralal Dasgupta, *Swadhinata Sangrame Barisal*, Vol. I, Calcutta, 1972, p. 110.

四 スワデシ運動における末端活動家

スワデシ運動における末端活動家は、ヴォランティア (volunteer) と称され、時にはナショナル・ヴォランティアあるいはスワデシ・ヴォランティアと形容詞を冠して呼ばれた。「バンデー・マトラム」(母なる大地に敬礼す)の slogan が浮上る赤い襷を肩から脇へと掛け、薄い黄色のターバンを巻いた彼らは、スワデシ期の光景に特異な彩りを添えるものであった。⁽¹⁾ ダッカ地方長官 (Commissioner, Dacca Division) R・ナタン (R. Nathan) は、一九〇七年四月二五日付けで、ダッカ地方四県のマジストレート (治安判事、コレクターと兼任であり、実質的には県長) に、ヴォランティアの実態を把握するため、一二項目からなる質問状を出した。それに対する回答として、バコルゴンジ県のマジストレート、ヒュージェスロブラー (R. B. Hughes-Buller) は五月二〇日付けで、かなり詳細な報告書を提出している。その報告書でヒュージェスロブラーは、^(モフオツシヨル)「地方の村では、各ヴォランティア団体には、一人の指導者がいて、彼はポリシヤルのオツシニーから命令を受取り、配下の者たちにそれを伝えている」⁽²⁾と述べているから、村落政治結社 (village samiti) の活動はヴォランティアのカテゴリーで理解されていたことになる。ポリシヤル、ジャロカティ、ポーラ (Bhola) などでは、カレッジの学生、学校の生徒がヴォランティアとして活動していたことも確かである。ヴォランティアの起源については、二〇世紀初めのシヨミティあるいはアカラ (鍊成所) の設立と結びつけて考えている政府文書もあるが、⁽³⁾これはシヨミティとヴォランティア組織を安易に同一視した考え方のように思われる。ヴォランティアは元来言葉の上からも、コンGRESや州協議会などに際して、志願して接待、設営などの雑用に従事した人々を指していた。従ってそれは一時的なものであった。スワデシ運動の開始とともに、英国製品購入阻止を目的としたピケットやスワデシ製品の普及販売などのために相当数の運動員が必要とされ、その要求に応じて参加した者もヴォランティアと呼ばれた。ヴォランティアがシヨミティに属する活動家であることも多かった。あるいは運動の長期化に伴い、ヴォランティアの性格も一

時的なものから組織化され継続的なものに転化し、その組織がまたシヨミティを称したという理由で、シヨミティの末端活動家が一般にヴォランティアと呼ばれるようになったのではないかと考えられる。従って、ヴォランティアはシヨミティの末端活動家を核としつつ、時と場合に依じて（たとえば、県レヴェルの政治集会とか政治的重要性をもつ定期市^トの占拠・ピケッティングなどの場合に）一時的に参加する遊軍を擁する伸縮性に富んだものであった。バコルゴンジ県の場合、一九〇六年四月、ポリシャルで行なわれたベンガル州協議会に際して、BM学院の学生・生徒をはじめとする多くのヴォランティアが募られた。彼らはBMカレッジの哲学教授シュレンドロナートロミットロを隊長（captain）として、設営・通信事務・食糧供給・接待といった任務に就いた。⁽⁴⁾東ベンガル・アッサム州では一九〇六年までは、ヴォランティアはあまり存在していなかった⁽⁵⁾、と政府文書に指摘される通り、ベンガル州協議会ポリシャル大会以前は、ヴォランティアへの言及は目につかない。このポリシャル大会を機に、ヴォランティアが組織化された。また村落に発生し、祖国友好協会の指導を受容れて統合化への道を歩み始めた村落政治結社の活動家たちも、ヴォランティアの名で呼ばれるようになったと考えられる。

以上の考察からすると、ヴォランティアの数を推定することは、甚だ困難である。運動にどの程度まで参加した者をヴォランティアと呼ぶかで、大きな食い違いが生じることになる。政府の推計も、恒常的な末端活動家を対象にし、それに交代でピケッティングなどの任務に就く学生・生徒数を勘案した程度の、決して統一基準に基いたものではない。しかし一応の目安として、一九〇七年六月まで登録されたと称するダッカ地方四県の統計を示すと次のようになる。モイモンシンフ県―二六〇名（明らかに不備に過ぎるものだ、と注記されている）、ダッカ県―二六二四名、フォリドプル県―九九〇名、バコルゴンジ県―二六四九名。⁽⁶⁾一方で、バコルゴンジ県の治安判事ヒュージェスブラーは、一九〇七年五月に、県内のヴォランティア数を最低に見積って四〇〇名、あるヴェテラン、ベンガル人警部は五〇〇―六〇〇名と推定するが、自分は過大評価であると思う、と述べている始末である。同じ報告書の中で、ポーラ郡のヴォランティア数は一〇〇名程

表I バコルゴンジ県のタナ別人口比

タナ名	タナ総人口に対するヒンドウの人口比 (%)	タナ総人口に対するムスリムの人口比 (%)	タナ総人口に対するヒンドウ上位三カーストの人口比 (%)	タナのヒンドウ総人口に対するヒンドウ上位三カーストの人口比 (%)
Jhalakati	46	54	11.0	28
Swarupkati	58	42	10.8	18
Barisal	32	67	10.5	35
Nalchiti	33	66	14.0	43
Bakarganj	31	68	5.6	18
Gaurnadi	51	48	11.8	23
Pirojpur	44	56	7.7	18
Mehendiganj	20	80	3.1	15
Matbaria	24	76	1.4	6
Bhandaria	30	70	3.5	11
Patuakhali	19	81	2.1	11
Bauphal	19	81	2.8	15
Amtali	11	84	1.1	10
Galachipa	14	84	1.5	11
Bhola	12	88	2.2	18
Barmuddin	18	82	2.2	12

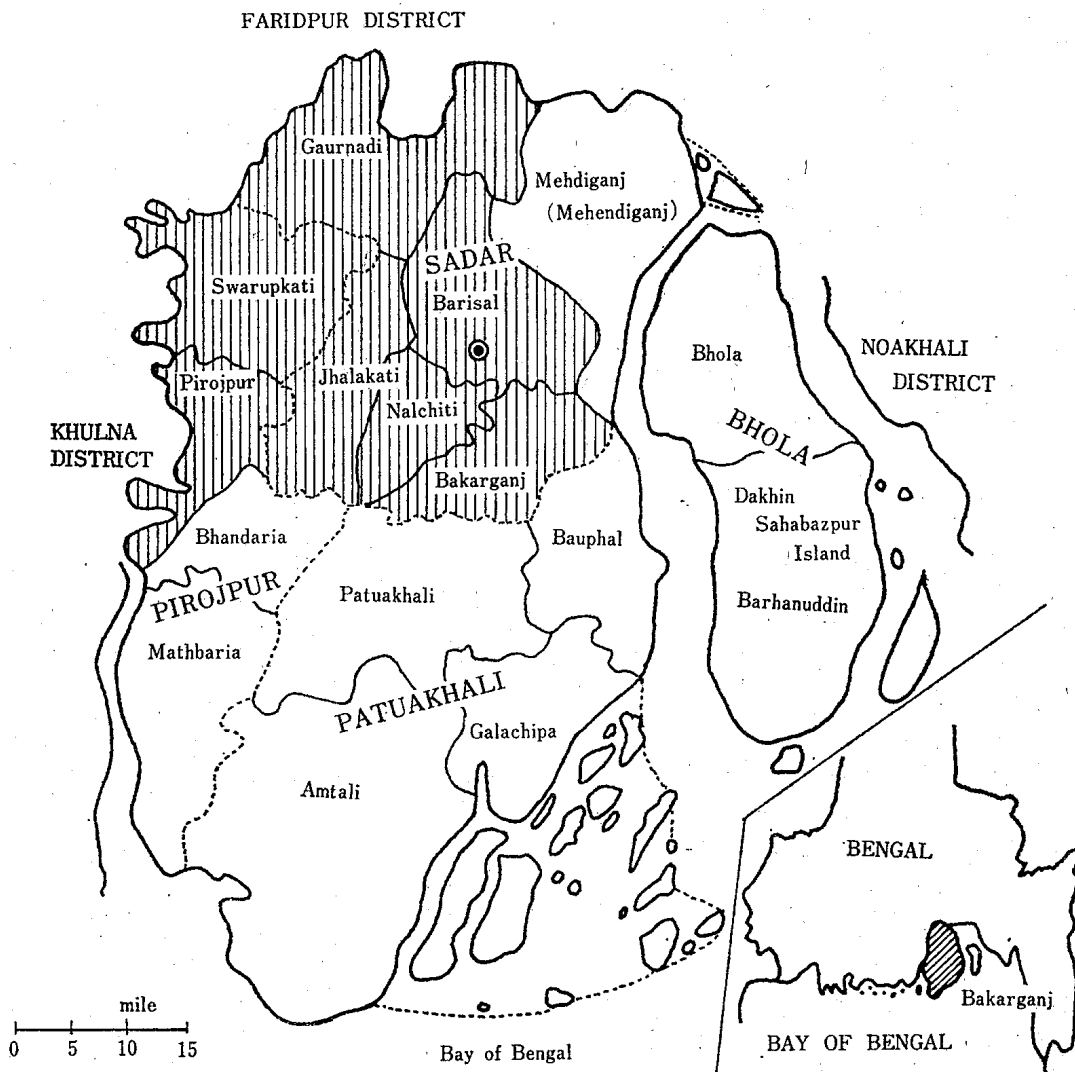
1901 Census of India をもとに作成

であり、その内二五名は襷を掛け制服を着た正規のヴォランティアで、残りは不正規のヴォランティアであると述べられている。そのどちらを採るかで四倍もの開きが出て来ることになる。従って結局は正当な数はおろか概数すら当てにできるものではない。しかし政府文書においても、ヴォランティア運動が、「バコルゴンジでもっとも発展した状態に達していた」と認められている。

ヴォランティアの分布は、シヨミティの分布と重なり、従ってスワデシ運動がどこで集中的に展開されたかを示すことになる。ヴォランティアの集中度が高かったのは、ジャロカティ、シヨルプカティ (Swarupkati) ボリシャル、ノルチティ (Nalchiti)、バコルゴンジ、ゴウルノディ (Gaurnadi) の各警察区であったと報告されている。⁽⁸⁾ 以上の六警察区に、ピロジュプル (Pirojpur)、コウカリ (Kaukhali)、アムラジュリ (Amrajuri)、ライエルカティ (Rayerkati) といった、この期の文書に取上げられることの多

図I スワデシ運動当時のバコルゴンジ県
 (棒線部はヒンドウ人口の多いタナ運動の集中地域)

スワデシ運動における組織について



い地名を含むピロジュープル警察区を加えることが許されよう。以上の七警察区は、図Iで示されるように、バコルゴンジ県の中央、北西、西部にかけてひとつのまとまった地域をなす。表Iから明らかのように、この地域は、ヒンドウ人口が県の他地域に比べて多い。ヴォランティア運動、ひいてはスワデシ運動がヒンドウの運動であったと評される所以がここにもくっきりとあらわれている。次にヒンドウ上位三カースト、すなわち、バラモン (Brahman)、ボイッド (Baidya)、カヤスト (Kayastha) のタナ総人口に対する割合をとってみても、この地域は他地域に比べて比率が高いことがわかる。しかし、ヒンドウ上位三カーストの影響力が直接問題になるのは、ヒンドウ社会においてであると考えら

れるから、次にタナ・ヒンドゥ人口に対する上位三カーストの比率を求めると、タナ総人口に対する場合と勿論同様の傾向が表われるが、南部・東部、東北部の諸警察区(タナ)における上位三カーストの占める率は意外に高く、殊にボーラ、ボウファル、メヘンディゴンジの率は、バコルゴンジ、ピロジュプル、シヨルプカティと同程度、あるいはそれに迫るものであった。ところで、県の南部、東部、北東部において、政府文書にスワデシ運動が多く言及されているのは、ボーラとボウファルの二つの警察区である。殊にスワデシ期の後半になると、ボーラについての報告が目立つようになる。ボーラでは、警察区全体に上位三カーストが分布していたのではなく、ボーラ村に集中していたと考えられる。ボーラ村は、ボーラ郡の郡庁所在地であり、郡庁のほかにも、二つのムンシフ裁判所、下級登録事務所、監獄、警察署、郵便・電話局、高等学校などがあり、⁽⁹⁾それらの施設に三つのカーストの人々がかなり職を得ていたと思われるからである。以上の考察から、ヴォランティア運動ひいてはスワデシ運動が、ヒンドゥ上位三カーストと密接なかわりのあったことが結論されよう。

では、このヒンドゥ上位三カーストによって具体的に何が意味されるかを、村のシヨミティの指導者層の分析と運動指導の面から検討してみたい。一九〇八年七月二〇日付のバコルゴンジ県の諸団体の一覧表には、明らかにスワデシ運動に関与した村のシヨミティと考えられるものが二三ある。その会長・副会長、書記長、副書記長クラスの人物についてみると、ジャロカティの商人(三人)を除くと、残りはほとんどがヒンドゥ上位三カーストである。彼らの職業は、以下のようになる。ザミンダール(一名)、タルクダール(一六名)、ハオラダール(一名)、教師・パンディト(一〇名)、年金生活者(一名)、医師(三名)、ナイブ(ザミンダラーリ管理人、二名)、弁護士(二名)、司祭(一名)、無職(九名)、記載のない者(二名)⁽¹⁰⁾。ここで先ず目に立つのは、タルクダールの数の多さである。⁽¹¹⁾無職と記載されたものは、姓から判断すると上位三カーストである可能性のある者ばかりであるから、土地所有者、中間的土地保有権者の家族の一員に相違ない。これにハオラダール一名を加えると、実に二七名までが明らかに地代収入に関与する階層であった。また右のリスト

でザミンダールと明記された者が一名にすぎないのも注目される。これは大土地所有者はヴォランティアの中核を形成していなかったことを意味する。⁽¹³⁾従ってヴォランティアは小土地所有者、中間的土地保有権者を主体としていたことになる。

一方、右のリストでもう一つのグループをなしているのが、教師・パンディト、医師、弁護士といった知的専門職に就く者たちである。彼らもまた、ヒンドゥ上位三カーストに属する者であったから、出自上、小土地所有者・中間的土地保有権層と重なり合うことになる。合同家族制下で、知的専門職に従事する層が、小土地所有者、中間的土地保有権層に属することは、ベンガル社会では殊更証明を要しない事実だと受取られている。⁽¹⁴⁾別稿で筆者は土地からの収入にだけ依存できなくなったこれらの階層が、知的専門職へと転じていく過程を論じた。⁽¹⁵⁾その意味で、無職と右のリストに記載された者たち（村のシヨミティの一般会員レヴェルになるとさらにその割合は増す）は、地代に依存する寄生層から知的専門職へという転化の過程の産物であったといえよう。タルクダールあるいはハオラダールと記されている者たちも、ヴォランティアは主に教育を受けた英語を話す階層であるという^{マジュストレイト}（⁽¹⁷⁾）報告にあるように、潜在的には知的専門職への志向性をもつ人々であったと考えられる。

土地との結びつきを切断了た訳ではないにしても、基本的には地代に依存する寄生層から知的専門職への転化を完了した層によってスワデシ運動の理想は形成され、倫理的骨格をもつ新しい理想として滲透していった。村落部の無職層、あるいは小土地所有者・中間的土地保有権者層は、知的専門職への志向性を内蔵するが故に、スワデシ理念にもっとも敏感に反応しうる階層であったのではあるまいか。換言すれば、ヴォランティアのスワデシ運動へのかかわりは、基本的には、彼らが小土地所有者、中間的土地保有権者であったことではなく、知的専門職への志向性を内蔵していたことによって、規定されていたのではないかと推測されるのである。⁽¹⁸⁾

従って、ヴォランティア運動が、県内きっての知的専門職の集団であるポリシヤルの祖国友好協会によって指導された

のは当然の成行であった。しかし、「ドットは村落への滲透にザミンダールとしての紐帯を利用することもできた⁽¹⁹⁾」というように、一般には東ベンガルのスワデシ運動をザミンダールの在地支配と結びつけて把握する考え方が根強くある。そこで、ポリシヤルの祖国友好協会の指導層が、ザミンダールの地的であるのか、知的専門職的であるのかをもう一度検討しておく方がよからう。

スワデシ運動に関与した主なザミンダールは、バシヨнда (Basanda) のウペンドロナート・シェーン、ジョロバリ (Jalabari) のボイクントナートロビッシャース (Baikunthanath Biswas) 及びプロモトナートロビッシャース (Pramathanath Biswas)、ボンズブニア (Bansbunia) のダーシュ (Das) 家、カロシユカティ (Kalaskati) のビッシュェッショナルロライチヨウドリ (Bisweswar Raychaudhuri) 及びブロッジヨカントロライ (Brajakanta Ray)、キルティパシヤ (Kiritipasa) のビノードクマールロライチヨウドリ (Binodkumar Raychaudhuri) らであった。このうち、ウペンドロナートロシェーンは、前述のように祖国友好協会の中軸メンバーの一人であった。オッシニードット自らもザミンダールであったことは確かである。⁽²⁰⁾

祖国友好協会がザミンダールの要素と知的専門職的要素を混在させていたことは否定できない。では、どちらを主導的とするべきか。オッシニードットがまずザミンダールとして規定されるのではなく、知的専門職業人として規定されるべきことは、⁽²¹⁾いくつかの論文で筆者の力説してきたところである。また、すでに第三節で見たように、祖国友好協会におけるザミンダールと称される者のパーセンテージは、一般委員会においても、執行部的性格をもつ機関においても、決して高いものではなかった。加えて、次のような事実は、祖国友好協会内におけるザミンダールの要素の副次的性格を明らかに示すものではなからうか。祖国友好協会は、一九〇七年三月七日の集会で、弁護士ニバロンチョンドロラダシユが同協会を代表して、ベタギロポンドル (Betagi Bandar)、ポンドルは河に面した交易センター) の事態を收拾するよう、ザミンダールのウペンドロナートロシェーン宛に書状を出すことを決定した。その集会では同時に、シヨティシユチ

ヨンドロロチャタジを同協会の書記長の資格で派遣することが決められている。ウペンドロナートロシェーンがベタギロポンドルにどのような権利を有していたかは不明であるが、仮に彼がなにがしかの権利を有し、それを行使することでポンドルにおける英国製品ポイコットの円滑な実施が期待されたにしても、最終的には知的専門職業人を核とする祖国友好協会の意向が貫徹されていることをここに読取ることができよう。また、ポリシャルのザミンダール、ピラジモホンライチヨウドリ (Birajmohan Raichaudhuri) は、祖国友好協会の会員として、ジャロカティの活動家と協議するために派遣されたことがある。⁽²²⁾ここでは、彼がザミンダールであることはたいして問題ではない。

以上から、バコルゴンジ県におけるスワデシ運動の本部ともいえるべき祖国友好協会は、ザミンダール主導の組織とはいえず、むしろ知的専門職業人の指導する運動組織であったことが確認されよう。しかし、村落における運動の現場、いま我々が問題にしている末端活動家が登場する現場では、事態はどのようであつたらうか。

ここでは、県南バンダリア警察区 (Bhandaria thana) のアムア (Anua) におけるヴォランティアの活動を例にとつて考察してみたい。アムアの例は、スワデシ運動の最高潮時である一九〇七年五月に起こっていること、それまで運動の展開が遅れた県南での事例であることに特徴がある。五月一七日 (金曜日)、三〇〜三五名のヴォランティアが長い竹の棒^{ラティ}を持って市場 (Hat) 定期市。アムアハートは毎週火曜日と金曜日に開かれた⁽²³⁾に集まり、「バンデーハマトラム」のシュプレヒコールを行ない、そのうち何人か (後に起訴される) は、英国製の砂糖でつくった菓子バタシャとリヴァプール製の塩を投捨て、英国製の眼鏡二つを壊した。五月二一日 (火曜日) には、副警部が監視に立ったので、ヴォランティアの行動は思うような成果が上がらなかった。二四日 (金曜日) には、ヴォランティア達は先任副警部が居合わせると聞くと、何もせず市場から立去った。これだけの取立てていうことは何もない経緯である。しかし、市場の「占拠」に至るまでの事情は興味深い。

アムアの運動の指導者はシヨロットチヨンドロロシユ (Saratcandra Basu) であつた。彼はポリシャルの祖国友

好協会の専従運動員 (paid preacher) ニシカント⁽²⁴⁾ロボシュの弟であり、ポリシャル地租査定事務所の一九〇五年一〇月のストライキの結果解雇された六三名の事務員の一人であった。彼は他の解雇された仲間と同じようにヴォランティアになった。⁽²⁵⁾この地方では、シヨロット⁽²⁶⁾トヨンドロ⁽²⁶⁾ロボシュの指導下に、組織化の行届いたヴォランティアの一人ができた。彼らの運動はバシユボニア (Bashbonia) から始まった。バシユボニアはアムアから一時間ほど離れた所にある村で、何人かのヴォランティアの父親達が市場⁽²⁶⁾の所有者であった。この小さな村の市場⁽²⁶⁾を押さえてから、彼らは近隣最大の市場のあるアムアへと進んだ。ヴォランティアの中心分子は、「その地方の勢力家の子弟」から成り、彼らは「実質的にザミンダールの使用人たちによって援助され」ていた。彼らが店主たちに圧力をかけたのは、(一)市場に対するザミンダールの権利を利用したこと、(二)カースト組織を利用して社会的ボイコットを課しえたことに基いている。ヒンドウの店主たちが、「明らかに起訴された人物たち」〔「ヴォランティアの中心分子」の影響下〕にあった点も注目される。⁽²⁶⁾

アムアの事例においても、土地所有権者の要素と知的専門職的要素(シヨロット⁽²⁶⁾ロボシュに代表される)の混在が認められるが、ポリシャル中央の場合と較べると土地所有権者の要素が強まっているのが観察される。第二節で見たように、一九〇五年一月七日付けの「指導部」のアップールでは、土地所有権者の権威を笠に着た小作人や店主へのスワデシ強制は否定されている。ということは、現実には運動の展開にあたって、土地所有権者の権威がかなり利用されていたこと、及び一方で運動の指導層(「知的専門職業人」)は彼らの権威に依存することを拒否しようとしていたことを意味する。この二つの重合、対立、葛藤を含む相互関係の内にスワデシ運動が姿を現わすと言えるであろう。県中央のポリシャルから村落部に向かうに従って、知的専門職的要素が減退し、土地所有権者の要素が増加する傾向を示す。これはポリシャル、村落部の中間に位置するジャロカティの場合を分析すれば明らかになる。これは別稿で詳論することにしたが、ここではジャロカティでは、有力商人層、教師が指導層を占め、全体として土地離れの傾向を示すことを指摘しておきたい。⁽²⁷⁾

冊

- (1) Govt. of Eastern Bengal & Assam, Political Branch. Criminal Investigation-Division (C. I. D.), File No. 212 of 1907, No. 103.
- (2) Ibid.
- (3) E. C. Ryland, Offg. Deputy Inspector General, Crime, Railways and Rivers, E. B. & A., 6 November 1908, Report on "National Volunteers" in E. B. & A. upto the end of April 1909, Home (Political) Deposit No. 26, August 1909.
- (4) Sharatkumar Ray, op. cit., pp. 176-180. Sureshchandra Gupta, op. cit., pp. 432-433.
- (5) Report on "National Volunteers", op. cit.
- (6) List of enrolled volunteers upto June 1907 (reported in Abstracts), Home (Political) Deposit No. 26, August 1909, Appendix I.
- (7) Memorandum on the National Volunteer Movement, Bengal and Eastern Bengal, by C. J. Stevenson Moore, 11 September 1907, Home (Political) Deposit No. 19, October 1907.
- (8) Ibid.
- (9) J. C. Jack, *Bengal District Gazetteer, Bakarganj*, Calcutta, 1918, p. 132.
- (10) Revised List of Societies, Sabhas and Anjumans

スワデシ運動における組織について

under Circular No. 8 S. B., dated 20 July 1908, Report

on Samiti in the Dacca Division, E. B. & A., for 1908, Home (Political) Deposit No. 2, April 1909.

(11) "in Swarupkati nearly half the volunteers are said to be talukdars", Sumit Sarkar, op. cit., pp. 358-359.

(12) Chakrabarti-二名, Ganguly-一名, 以上バラモン。Dasgupta-一名, ボーンド。Basu-一名, カヤスト。Dasボイットあるいはカヤストの可能性。Pal-二名, De-一名, 以上カヤストの可能性あり。

(13) ただし、シユミットシヨルカールも指摘するように、ザミンダールは漠然とした用語であり時にはタルクダールあるいはより下位の中間的土地保有権者を意味した。政府文書でスワデシ運動におけるザミンダールの役割が強調されるのは、それが一握りの階層の運動にすぎないとみなそうとする政府側の偏見の所産であることをシヨルカールは指摘している。Sumit Sarkar, op. cit., pp. 327-328.

(14) 小説、自伝、回想録などには、長期休暇に故郷の村に帰る知的専門職業人の家族のことが数多く扱われている。

(15) 拙稿「スワデシ運動と中間的土地保有権者」(前出)を参照されたい。

(16) 寄生層と規定するのは、彼らには一般に所有地あるいは保有地の収益性を高め、地主的に経営するという生産に結びついた積極的な姿勢が見られず、いかに収穫高の分け前を確保する

か、あわよくば増大させるかという、取分(分配)について関心が集中しているように思われるからである。

- (17) R. B. Hughes-Buller, District Magistrate, Bakarganj, to R. Nathan, Commissioner, Dacca Division, 20 May 1907, Govt. of E. B. & A., Political Branch, C. I. D., File No. 212 of 1907.

(18) 『タイムズ』紙のインド特派員、ヴァレンタイン・チロル (Valentine Chirrol) の『インドの不穩』(Indian Unrest, London 1910) 以来、インドの民族運動を、教育を受けながら就職機会の得られない中間層の不滿によって説明する説がある。地代に依存する層から知的専門職への転化は、後者の数的拡大が前者の需要に比して少なかったため、問題を引起したことは事実である。しかしこの過程が、知的倫理的レヴェル・アップの努力を伴っている点は見逃してはならないと思う。普遍性をめざす彼らの理念こそ、彼らが運動を民族運動として提起しえた根拠であり、彼らの運動指導が受容られ支持された理由であった。

- (19) Leonard A. Gordon, *Bengal: The Nationalist Movement 1876-1940*, Delhi, 1974, p. 84.

(20) オッシニーク・マール・ドット、ノトゥッラバードのラーイ家とシャハールカーストのある家族は、チャラデイに共同で土地を所有していた。このザミンダリーはもとともラーイ家の所有するところであったが、後にオッシニーク・ドットとシャハが所有に参加した。オッシニーク・ドットとラーイ家の使用人は共同

してシャハ家と対立した。ラテイヤール(棒で武装した者)が備われ、闘争で一人が死亡した。この事件に言及して、東ベンガル・アッサム州の書記官長 P. C. ライアン (Lyon) は、オッシニーク・マール・ドットといえども自分の階級(ザミンダリー)の偏見から免れてはおらず、ザミンダリーに關係する事となると、彼もほかのザミンダールと同じように暴力に訴えることを辞さないのだと皮肉っている。The Judgement of the Case, King-Emperor vs. Basar Sikdar and others, 18 January 1909, Home (Political) Deposit No. 6, November 1909; P. C. Lyon to Harold Stuart, Secretary to the Govt. of India, Home Dept., 29 July 1909, *ibid.*

- (21) 拙稿「インド民族運動形成期における地方活動家—東ベンガルの場合—」『アジア研究』第二六卷第三号、一三三—一三二〇ページ。

- (22) Translation of the proceedings of the Swadesh Bandhab Samiti meetings, Home (Political) Deposit No. 13, July 1909.

- (23) Diary of the District Magistrate, Bakarganj, for the week ending 27 July 1907, Home (Political) Deposit No. 35, August 1907.

- (24) 拙稿「スワデシ運動と中間的土地保有権者層—東ベンガル・バールゴンジ県の場合—」(前出) 三六一—三七二ページ。

- (25) R. B. Hughes-Buller to R. Nathan, Commissioner,

Dacca Division, 20 May 1907, Govt. of E. B. & A.,
Political Branch, File No. 212 of 1907.

B Nos. 3-5, September 1907.

(29) 'The Judgment of the Amooa 'Swadeshi' Case',
Bengalee, 25 July 1907, reproduced in Home (Political)
of the Magistrate on the affairs at Jalakati), Home
(Political) A No. 106, August 1907.

五 おわりに

スワデシ運動は、すでに指摘したように、単なる政治運動以上のものであったから、その分析もさまざまな角度から行なうことが可能であり、かつ必要でもある。小稿では、東ベンガル・バコルゴンジ県の祖国友好協会を取上げ、その運動組織の面を分析することを試みた。ここで論点を要約することはしないが、バコルゴンジ県の祖国友好協会がなぜ典型的なスワデシ期の組織と呼ばれうるのか、また同協会の指導下になぜ最も強力な運動がバコルゴンジ県で展開されたかを、かなり明らかにしえたのではないかと思う。

小稿では、スワデシ運動における知的専門職業人の役割が重視されているが、このことはザミンダールをはじめとする土地所有権者の影響力を否定するものではない。バコルゴンジ県におけるスワデシ運動は、県中央の祖国友好協会の場合でも村落の政治結社のレヴェルでも、知的専門職業人層およびその背景にあるヒンドゥ上位三カーストを中心とする小土地所有権者と中間的土地保有権者層が指導するところであった。県中央のポリシヤルでは知的専門職業人の力が圧倒的であり、村落部では土地所有（保有）権者の要素が強く出て来る。しかし、同県におけるスワデシ運動においては、土地所有権者の力は現実に利用されたが、運動の理念・指導面を見るならば、彼らの力のむきだしの適用は原理的に否定されており、小土地所有権者あるいは中間的土地保有権者から知的専門職業人へと転化しようとする中間層のイデオロギーが貫徹している——これが小稿の提示しようとする結論である。